あけぼの　2011年8月号　平成23年8月1日号　第56巻8号（毎月1回1日発行）

300円

2011 8 あけぼの

平和のゆくえ――いま、変動の波のなかで

特集対談 沈黙し、考え、畏れ、そして行動を……早乙女 愛×新谷のり子

積極的戦略的につくりだす平和 松浦悟郎

東日本大震災のために祈る―…教皇代理・サラ枢機卿の訪問 …英国国教会による東日本大震災追悼礼拝 編集部／ウオーターズめぐみ

連載

"ことばの杜"への小道 PartⅡ／「ことば」にこだわり工夫する授業を展開　お相手・蠣崎裕子氏／山根基世

ミステリアスな日々／「語り継ぎ」のかたち 木崎さと子

活憲とヒューマンライツ（人権）／太陽の汗、月の涙―何のための発展か 伊藤千尋

光と風のおくりもの／「偏食の母」三浦暁子

キリストの足跡／神の子らの家族 百瀬文晃

山根基世

やまね・もとよ

ＮＨＫ退職後たちあげた、有限責任事業組合「ことばの杜」代表。著書『ことばで「私」を育てる』『「ことば」ほどおいしいものはない』ほか。

蠣﨑裕子

かきざき・ゆうこ

東京都台東区立浅草中学校教諭

〝ことばの杜〟への小道 Part Ⅱ

第８回

「ことば」にこだわり工夫する授業を展開

生徒も教員も〝よく聞き、よく話す〟

山根　先生の今日の授業は化学変化……。

蠣﨑　化学変化と原子・分子、すべてのところを含んでいます。

山根　その用語についてのクイズ形式での授業でしたが、先生のオリジナル授業ですね？

蠣﨑　学校で取り組んできた「表現力は生きている」の実践で、思考の過程を考えるようにして、単元ごとの授業が終わったときにまとめとして行います。言葉だけではなくて、道筋も含めて考えられるか、全体から部分を見、もう一度フィード・バックする。もう一つは、アンサーの反応を見て、簡単に答えられるものか、そうじゃないかを考える、という心理的な作戦もあります。

山根　人間の表情も大事ですよ、とおっしゃって、人間学のようなものも含んでいますね。この授業では、紙にアンサーが書いてあって、生徒たちがアンサーを導き出すための質問をしていく。ある単元を学習し終えたときには、おなじみの方式なんですね。

蠣﨑　そうです。イエス・ノーで答え、ＮＧワードもあります。踏んではいけない地雷（笑い）つまり絶対に間違えてはいけないものがあって、今日も生徒たちが迷っていた原子や分子、あれは踏んではいけない地雷で間違えてはいけないものです。授業を全員参加で、と思っていまして。

山根　全員が手を挙げていましたね。午後の授業ですが一人も寝ている子はいないし。（笑い）

子どものやる気、参加を大事にする授業でもありますね。

蠣崎　私が主ではなく、彼らにやってもらう。私はアドバイスだけです。今日は、彼らに自信がなかったので個人戦はいやだ（笑い）とグループ戦になったのですが。

山根　先生は理科の先生ですが、非常に言葉を大切に授業を進めていらっしゃる。

蠣崎　言葉にこだわらないと問題が解けないんです。そこに何が書かれてあるか、読めない人が多くて、教科書の内容を読みきれない。そして曖昧なことを言い、曖昧な答えをしようとする。でもそれは分かってない。分かったつもりになっても、実際にそれを活用しようとするとできない。最後まで突き詰めて、それは何？　どうなの？　というところまで行かないと。

山根　理科を教える中で言葉が大事だというのは、いつごろから意識なさいましたか。

蠣崎　NHK日本語センターの杉澤陽太郎さんのところでトレーニングを始めてからです。今でも叱られていますが。（笑い）

山根　杉澤さんはNHKの私たちの大先輩で、朗読の教え手としては日本で右に出る人はいない方ですが、でも理科の先生である蠣崎先生がなぜ杉澤さんのところに行かれたのでしょう？

蠣崎　偶然で、中学で最初に受け持った部活が放送部で私には全くその素養がない。何をしていいのか分からない。そのときにたまたま、先生のためのセミナーという紙をもらいました。

山根　日本語センターの？（笑い）

蠣崎　それを見て行ってみようかな、と行ったのが始まりです。二十年以上前のことです。

最初は読むだけを習いに行ったのですが、読むも話すも言葉を吸収することに対しては同じで、言葉を知らなければだめ。伝えるにも伝え方がある、と徹底的に言われて、そこから変わったかもしれません。教員を含めて大人だから話はできる、伝わると思う。でも実は何割も伝わっていない。伝え方がまずいのです。授業していても分かりますが、顔を見ていると伝わっていないのが読めます。じーっと黙っているのはいい授業ではない。分かる、分からないを言ってくれないと、どこまで戻ればいいか分からない、と生徒には話すのですが。

山根　放送部の担当になって、まず気づかされたのは、伝わらない、と。それからは？

蠣崎　東京都の中学校放送コンテストや全国のNHK杯コンテストの仕事をお手伝いしているうちに、読むだけではなくて、話すことも、番組を作ることも全部つながっていると気づき、少しずつ手さぐりでやってきただけです。

山根　ご自身も朗読を熱心に勉強してらして、大賞までお受けになっていますが。

蠣崎　叱られながら。（笑い）

山根　朗読を深くなさることで、なにか気づかれた、教師として得たものがありますか？

蠣崎　やっていなければ「ことば」にこだわってなかったと思います。現在まで残っている作品の文章は、残ってきたなりの意味があり、そうか、これが私の気持ちに近いと思ったりする。たぶんそれが読むということだと思います。

山根　書かれていることをただ音声化するのではないですね。表現も自分の中で咀嚼（そしゃく）できたわけですね。

蠣崎　咀嚼しているかどうかまでは分からないのですが、こう言ったほうが分かるだろうかとは考えます。分かっていないことが彼らの顔に書いてある。じゃこの言い方はだめだ、別の方面から言おうとすると、だれかの言葉をさがして使っているかもしれないですね。

山根　朗読することで言葉に対する感性のようなものが深められることは確かですね。

浅草中学に転任していらしたとき、この学校は全体でクラスが六つぐらいしかなかった、と。

蠣崎　すごく小さな学校でしたが、今は一学年が六クラスになりました。

山根　父母たちからの信頼ができて生徒数も増えてきたということですね。校長先生の方針もあるでしょうけど、何を変えようとして？

蠣崎　知識だけを吸収するような、教える勉強では立ち行かなくなることが分かっていたので、その当時は海のものとも山のものともつかない状況で、日本語センターに、タイアップして研究をしたいのでノウハウを教えてください、と頼みました。なんのためにするのですか、と厳しいご意見をいただきまして、ハア～とか言いながら。（笑い）

山根　当時の浅草中学の生徒さんたちはどういう状態だったんですか。

蠣崎　私が来たときは荒れた後で、人が少なく

なって収まってはいました。いろいろな取り組みが始まって、その中の学力向上プロジェクトで二つの柱を作りました。「学習」と「表現力」です。「表現力」が「学習」に戻っていくことを目標にして、表現したことを学習の中に生かして活用していく。ではその表現とはなんだろうか、ということで最初に始めたのは、自分の気持ちを伝えることができるようにしよう、と。私はそこをもう少し深めて、去年送り出した生徒の三年間で、相手の立場に立って聞けないだろうか、と。たとえば授業で話している私が主役ではなく、聞いているあなたたちが主役で、どう聞いてくれるか。聞き方にはいい聞き方がある、と。NHKからノウハウをいただいたのですが、「聞く」にはヒヤーとリスンとアスクがある。そのアスク、尋ねるところまでいきましょうと。それを三年間でやり通してきました。

山根　学力向上プロジェクトの一つとして、日本語センターに駆け込むところがすごいと思います。（笑い）

蠣崎　去年の卒業生は違いました。卒業式を前にして教師と会話をしているのですが、非常に楽しそうにしています。子どもたちの思いは「学校が楽しかった」。卒業式の答辞の中で、月曜日が楽しかった、と言うぐらいに、学校に来て遊んでいます。（笑い）月曜日、友達と会って話すのが楽しいのです。お互いのコミュニケーションが取れている。毎週一度、だれかが地域のニュースを伝える。一人一回は絶対にやらなければいけないノルマがあるのですが、話している人が楽しくやることが多いのです。聞いている人も、何を言うだろうかと楽しみにしていました。

山根　友人たちを理解することが自分の居場所として心地よいものになっているのでしょうね。六年の間に生徒数が三、四倍になったというのは、やはり何かが大きく変わったということでしょうね。

蠣崎　地域の口コミは恐ろしくて。（笑い）いいという評判がたつと中身もあるでしょうが、多くの人が集まる。今は落ちついていて、非常に過ごしやすいのと、校長先生がいろいろな行事なども進めてきているので、それが功を奏していると思いますね。

夢を持ち、求めて、道を切り開いていくように……

山根　先生は、ご自身のやり方としてアウトプットをきちんとすればインプットも増えてくる、という仮説をたてられたそうですが。

蠣崎　それは私ではなく、養老孟司先生がおっしゃっていたことですが、そうだと思いまして。だいたい今までの教育は、インプット中心ですよね。

山根　学校は教え込みますね。

蠣崎　アウトプットさせないので、子どもたちの知識が中で回らずに溢れて終わり。アウトプットすると、できないことが分かります。理科などすぐ分かります。知識はあっても、その知識はどこに繋がっているのか、どう使うのかを考えていない人が多い。でも実際はその事象や現象は、つながっていかないといけないはずなんです。つながって日常の生活のどこで活用できるのか、と。

山根　理科の授業でのアウトプットというのはどんなことを？

蠣崎　実験もそうですが、教室でもできないことはないですね。言葉を与えておいて、あるいは今やっていることを一分間でスピーチしてください、とかね。

山根　やはり言葉で。

蠣崎　NGワードがそれですが、踏んではいけない地雷を踏むと、スピーチです。たとえば、原子なら、原子の名前を黒板に一人一個は必ず書きにいく。全員が書くのですが、同じ答えになってはいけないので、さっさと書きにいきます。（笑い）でもどこかでNGワード、分子を書いたりして、それはNGです。地雷を踏んでいる。その人はそこで一分間のスピーチ。ただし、これは抜き打ちでやるので、いつ地雷を踏んでもいいように一人ひとりが一個、必ず他の人に聞いてもらっても大丈夫なような説明を準備しています。

山根　簡単なことのようでも、だれかにきちんと分かりやすく説明しようとすると、ほんとうに自分で理解していないと語れませんよね。

蠣崎　相当難しいです。それも短い言葉で語るわけですから。

山根　難しいことをやさしく語るのがいかに難しいか。でもそれは子どもたちにとっては、非常にいい勉強の場になっていますね。

蠣崎　すぐ効果が上がるかどうかは分かりませんが。

山根　教育は、今日やって明日すぐ効果が出るものではないですよね。でもご自身としての手応えみたいなものはお感じになりますか。子どもたちが変わっていったなということは。

蠣崎　三年間一緒にやってくれれば変わるのは目に見えて分かります。それは私がやったからどうなったというのではなくトータルで、先生たちとチームを組んでやってきている仕事なので、卒業させるときにこんなことができるようになった、と。でも願うことは学校が楽しくて、子どもたちがいきいきと活動して、思いどおりの進路を進んでほしい……進路についてはなかなか思いどおりにいきませんが、勉強の方法さえ自分で分かっていれば、この先大人になってもなんとかなるだろうと。今の子どもの特徴ですぐ答えを知りたがり、答えはなんですかと待っていますが、答えは君が探すんです、と。だから分からないこともいいのではないかと思っています。

山根　今教育の世界では難しさも言われますが、先生ご自身は理想の教師像は、どのように思ってらっしゃいますか？

蠣崎　私、先生と言われることに抵抗があって、うがったことを言うつもりはないのですが、たぶん私は子どもから吸収していると思います。子どもからもらっているものが多い。子どもたちは全部違います。私が知っていることは少ない。それぞれの場面で子どもたちのほうから提供してくれる情報や課題があります。その課題をどうやって解決していくかが闘いです。家に帰って、ああでもない、こうでもないと考えて、考えて、じゃこれをやってみようかと。

山根　次はこういう授業をやってみよう。今度はこうやってみようと考える……。

蠣崎　考えます。書きます。テレビを見ますね。メモします。新聞を見ますね。メモします。メモ魔かもしれませんね。

山根　四六時中、どこかで教育のことを考えてらっしゃる。

蠣崎　教育というか、問題解決、課題をどうすればいいだろうかと考えてはいますね。

山根　課題というのは。

蠣崎　何かやれば必ず課題は残りますよね。あの生徒の単純な「質問」はどうしてだろうかとか。（笑い）あれはもうちょっとなんとかならないだろうか、どうしたら次は内容が深まっていくだろうか、と。質問の仕方が上手になるにはどうしたらいいのだろうか、と考えて始めたのが、いい質問を出したときには、グッドカードを渡す。なにかもらうとうれしいでしょう。（笑い）

山根　今日も催促してましたね。今のはいい質問だ、って自分で言って。（笑い）

蠣崎　いろいろ考えていかないと、マンネリ化するとたぶんだめだろうなというのがあるんですね。この世代の子どもたちはゲーム世代で、論理をいくら展開しても、難しいです。正論を述べても無理。正しいのは彼らも分かってますから。だからなんなのよ、という世界です。（笑い）

山根　子どもたちを育てていくうえで心がけてらっしゃることは。

蠣崎　目的意識を持つ、何か求めるものがある、そういう生き方をしましょう、と。こうなりたい、というのがない人が多いかもしれない。求める人は必ず取りにきますよね。どんな仕事でもかまわないのですが、簡単に言うと道を自分で切り開いていってほしいですね。

山根　目の前にある道をただ人に言われるままに歩くのではなく、自分がこう生きたいという何かを。

蠣崎　これは学校生活だけではなく、死ぬまでそうだと思っています。夢を持ち、求めて行動する。世の中で活躍してらっしゃる方は共通して、求めるものがあるように思います。

山根　子どもたちが、自分たちの人生を切り開いていく力を持ってくれればいいですね。